

会長賞

中学生の部



「少しのアシストで増やす笑顔」

青森市立甲田中学校
1年 永長 ながむね 佑麻 ゆうま さん

吃音、それは言葉が詰まったり、言葉がうまく出てこなかったりする障害で、日本人の約一パーセントが吃音らしい。そんな吃音である子が中学一年生の今現在、僕と同じクラスで学校生活を送っている。その子とは小学一年生の時から同じクラスだった。当時、僕は吃音に関する知識が全く無かったため、少し変だと思いつつ距離を取っていた。発表する時も言葉が詰まり、自分ももどかしさを感じていた。しかし、そんな印象が少し変わる出来事が起こった。放課後児童クラブで一緒にカードゲームをしていたときのこと。普段の発表とは異なり、その子はあま

り言葉に詰まらず話していた。所々言葉に詰まる場面もあったが、その子と楽しくカードゲームをすることができた。それから徐々に僕とその子の仲は良くなり、楽しく会話ができるようになった。それでもその子が発表するときは言葉が詰まっていることがほとんどだった。三年生になると、僕は別々のクラスへと移動してしまった。

二年後、僕は五年生へと進級した。吃音のあの子とも再び同じクラスになった。クラス替えにより自己紹介が行われたが、その子やはり言葉が詰まっていた。しかし、一、二年のときと比べるとスラスラと喋れるようになっていた。本人によると最近通院し、上手に喋る練習をしているそうだ。このことを聞き僕は驚いた。上手に喋れるように練習するといふその子の強い気持ち、僕の心に刺さった。見えないところで努力していると知り、僕はやる気と勇気をもらった。しかし、その子は大変な学校生活を送っていた。班で話し合いをする時は言葉が詰まり、班のメンバーから冷たい目で見られていた。また、授業で教科書を音読する時は、上手く読めず、先生

に途中で止められていた。一生懸命やっているのにかわいそうだと僕は思った。しかし助けてあげることはできなかった。そんな中、ある先生は教科書を音読する際、隣の子と一緒に音読をさせていた。そうすることで吃音のその子も周りに迷惑をかけているという心配がなくなったと思う。さらに、授業も円滑に進めることができる。僕は先生の取りくみに感心した。

それから二年後、僕は中学校へと進学した。またしても吃音の子と同じクラスになった。その子とは仲が良かったので嬉しかった。ある日テレビをつけると、吃音について放送していた。見てみると、吃音にも種類があること、飲食店で注文する時など様々な苦労があると分かった。さらに吃音の人には、話させないであげるのではなく、話すのを見守り、手伝ってあげることが親切だと分かった。そのことを本人に話してみると嬉しそうに共感してくれた。そんな矢先、その子と僕は同じ広報係になった。広報係は朝の会でニュースを発表する役割がある。その時僕は気付いた。その子と一緒にニュースを読

めばいいと。早速、朝の会で実践してみた。その子が調べてきたニュースを僕と一緒に読む。その子もニュースを読むことが出来るし、二人で読むことでスラスラと発表できる。本人も満足そうで笑顔だった。いつも厳しい先生にも、

「頑張つて読んでいますね。」

と褒めてもらった。僕も、その子のために良いことができて嬉しかった。

現在、世の中ではタッチパネルでの注文や、デジタルを活用しての発表など、言葉が上手く話せない人でも、不自由なく生活出来るようになりつつある。ただ、未だに発言しなければいけない場面は山ほどある。そんな場面でも、本人の頑張りも大切にしつつ、上手にアシストしていけば、笑顔を増やしていけると思う。これからは一人一人に寄り添うことを大切にし、笑顔が増えるようにサポートしていきたい。